

## イシス 20 周年記念 豪徳寺輪読座「白川静を読む」のご案内 輪読師・高橋秀元

イシス編集学校 20 周年を記念して、いよいよ輪読座の「白川静を読む」が始まります。皆さん、ご参加くださいませ。

白川静さんとは少なからぬご縁があり、私なりに、今回の輪読にかける意気を表明して、「ご案内」に代えさせていただきます。

### (1) インタビュー『漢字の記憶』と『遊字論』『道字論』から入る

「遊」の第二期が始まって、「東洋精神圏」というインタビューの特集をまかされることになり、1978 年 10 月に発刊予定の「遊 1003 号」に、白川静のインタビュー記事を書けることが決まったのです。それで、白川先生にインタビューを申し込む手紙を何回も送ったのですが、「東から来る者は受付けない」という趣旨の返事が届くばかりでした。松岡編集長は怒りを抑えきれない雰囲気になったので、1978 年の 8 月、突撃取材を敢行することにし、京都に出向きました。

その日の京都は早朝とは信じられないほど暑く、編集長にどうしたらよいかと電話したら、「インタビューができるまで帰ってくるな」という冷たい返事。途方に暮れ、寺町を下っていたら、梶井基次郎が爆弾に見立てた檸檬を買った果物店がありました。そこでぼんやり立っていたら、ショー・ケースに汗をかいた西瓜が目についたのです。仕方がない、これで行こうと決心し、それを持って西京の稲荷山の白川先生のお宅に向かったわけです。長い坂の上にあるご自宅に、午後 2 時ころ、私は大汗かき大きな西瓜を下げた滑稽な姿で白川先生のお宅の前に佇んでいました。

思い切ってベルを押すと、写真そのままの白川先生が出てこられて、しげしげ私の哀れな恰好を見て大笑いされた。私は心中ヤッタと快哉して自己紹介すると、白川先生は「入れ入れ」と仰った。その日はお宅に白川先生しかおられず、私は台所で西瓜を切って、先生と二人でムシャムシャ頬ばりながら、いきなり古代中国の鐸や鈴の話からはじめたのです。それから夜間まで白川世界をめぐるように話が進みました。このインタビューは、無事に「遊 1003 号」に『漢字の記憶』として掲載され、その次号から『遊字論』『道字論』を連載してくださったのです。



白川静

そのインタビュー『漢字の記憶』は、今読んでも新鮮なところがあり、白川先生の著作にはないような話題もあって面白いものです。それで、輪読座「白川静を読む」の第一回の皮切りに、全集にもおさめられていないインタビュー『漢字の記憶』を輪読し、白川漢字世界の歩き方に見当をつけていただくことからスタートします。その上で『遊字論』『道字論』を抜き読みし、

白川文章に慣れていただいたら、いよいよ本格的な輪読に入りたく思います。

## (2) 怖るべきガリ版の自由と「へん」と「つくり」の編集

白川静の著作には、以上に挙げた著作の外に、『孔子伝』、『中国の神話』、『中国の古代文学』、『漢字百話』、『初期万葉論』、『中国古代の文化』、『中国古代の民俗』、『後期万葉論』などがあり、これらはどれも、東洋を考えるにあたっての本質を貫いているものです。ぜひお読みください。なお、松岡正剛『白川静 漢字の世界観』（平凡社新書）は、白川静の漢字の世界を巡るにあたって最高の導きとなることでしょう。

ただ、今回の「輪読座」では、単行本は避け、『白川静著作集』に収録された小さい論考を、毎回の枠組みに従って連続的に読み、その発想の編集過程に立ち会っていくという独自の編成にしたいと思います。参加して下さる皆さまには、六回の輪読で白川静の著作を自由自在に涉猟できるようになっていただけると確信しています。

白川静には、単行本のほかにガリ版(謄写版)で書いて刷りだしを原版にして本とした著作があります。そのようなガリ版で刷った論考を集成したものは、『甲骨金文学全集』としてまとめられています。どうしてガリ版かといえば、文中に殷時代の甲骨文字や周時代の金文、秦漢時代の篆書や隷書の文字で書かれた文や句・文字を自由に引用、例示したり、その文字の変遷を辿ったりしたかったからです。そんな活字はないわけですから、古代漢字を自由自在に織り込んだ文章を発刊することなど、とてもできません。もちろん、コンピュータで打ち込んだり、出力したりすることは全くできないわけです。我々は、技術の発展によって自由になっていくと思いつまされているところがあります。そこには、自由をだれか他者に預けて安心し、それを自由だと勘違いしているところも見受けられます。

ガリ版であれば、どんな文字を書こうと自由なわけです。でも、白川静のガリ版刷りの本を手に入れて読もうとしても、我々は古代漢字を全く読めませんし、日常で使用しませんから、「猫に小判」です。例え「猫に小判」であろうと、書きたいことを書きたいように書きたい文字で書くという自由が、白川静のガリ版本には溢れかえっているようです。その自由こそが、白川静の「反骨」というものでしょう。

なお、白川静『甲骨金文学全集』が「白川静著作集 別巻」の3巻分に及んで収録されて出版されましたので、その中の最もおそろべき呪術とされた「壘術」と文明発生時に華北の基本民族の運命を描いた「羌族」に関する論考の読める部分を抜き読みして、深くて自由な白川静を味わっていただくことといたします。



ガリ版の文字を切る(入力)



ガリ版の学級新聞

ちょっと高齢の方々は、小学校の頃に学級新聞を作ったりするために、ガリ版を切った思い出があまりありませんが、今となってはガリ版といって、その映像がパッと思い浮かぶ人はほとんどなくなっていることでしょう。ガリ版新聞をつくっていた小学生たちは、同級生の関心を引くために、新しい漢字を創作して面白いコラムを用意したものです。自由に

漢字の「へん」と「つくり」の組み合わせを変えて、これまでになかった漢字をつくりだし、その意味を説明して、評価したり、面白がったりするわけです。まさにその編集こそが、甲骨文字を一挙に多様化させた動因だったと、白川静は考えていました。

白川静は、その「へん」と「つくり」の組み合わせの仕組みこそが漢字の本質だと考えています。だから、漢字は絵画から発生した絵文字ではないというわけです。すなわち漢字の線は「輪郭」から発生したのではないという。我々はどうも、漢字を絵文字として教えられ、刷り込まれて、信じ込まされているところがあります。そして、多くの「漢和辞典」や「漢字辞典」の多くが漢字は対象を写したことに根拠を置いて解説しています。

もちろん、中華亜大陸の最古の文明には絵文字があったようです。それとは全く断絶して突如、短期間に少人数の編集チームが甲骨文字を編集したというのです。それはどういうことなのか。これも今回の輪読会で探ってみたいと思います。

### (3) 「字典」と「辞典」の問題

白川静は、あくまで『字典』にこだわり、『漢字辞典』は漢字の本質を欠いているとして、その漢語の解説や文字の原型の説明に対抗していたときがありました。

現在の中華人民共和国の簡体字は伝統的な「へん」や「つくり」の法則を廃止してしまいました。「へん」や「つくり」が形として残っていても、それを重視していません。中共の「国語辞典」では発音の「ピンイン」(漢字の読み方をアルファベットで示した発音記号)で漢字を引くわけです。ケイタイ、スマホでも「ピンイン」で漢字変換します。

台湾(辛亥革命で成立した中華民国の後裔国)の「国語辞典」では清朝の漢字を数を制限し、画数を減じた繁体字を用いています。そこでは引きたい単語の発音の冒頭の音のページを確認します。巻末にはその音を一覧した「注音査字表」(日本語の五十音表に相当)の目次があって、そこから引きたい言葉の冒頭の音を確認します。そのページを見ると、ずらりと冒頭音が同じ漢語がならんでいて、その言葉の第2音が「注音査字表目次」が示す順序で並べられ、第1音・第2音を同じくする言葉がでてくると、さらに第3音が「注音査字表目次」に従って並べられ、というように、こうして求める言葉に到達します。これは、日本語の「国語辞典」の引き方と同じです。

中華亜大陸の近現代の『国語辞典』は、いわば西欧の「単語:Word」(概念;conceptの記号的表現)に相当する複数字連結漢語を見出し語とし、一字を見出し語とする時も、西欧の「単語:Word」として扱い、それを解説する「辞典」になっているのです。

中華民国の国民党や戦後の中華人民共和国が編纂した漢語の「国語辞典」、それと歩調を合わせて日本で編纂された「漢和辞典」類は中国と日本の間の社会・文化・政治等の交流になくなくてはならないものです。そればかりか、中華人民共和国政府、台湾政府(旧中華民国)が公認する「漢字辞典」は、世界の各国語と中国語の辞典における中国語の基本であって、これを否定することはできません。

にもかかわらず、白川静は「漢字辞典」ではない、漢字の1字1字の自立を認めて見出し語とする「字典」にこだわりました。白川静は『字統』(1984:字の起原的な形体とその意味を示す)、『字訓』(1987:訓読み・音読みする日本漢字の体系、扶余・新羅の誓記体・吏読体に言及)、『字通』(1996:空海の『篆隸万象名義』から近現代の漢和辞典・字典までの編集法)、『常用字解』(2003:中高生向け入門字典)を編纂し続けました。

一体、この大事業を実行させた狙いは、どこにあったのか。「遊1003号」のインタビュー『漢字の記憶』にも出てきた許慎(58年?~147年?)の『説文解字』が問題になるのですが、白川静は表音文字と漢字を比べて、「漢字はすべて全体の中に自分を位置づけている。個は小さな全体であり、小宇宙です」と言って、漢字の在り方について、ライブニッツの「モナド」を例証、しています。ライブニッツは、実は漢文に堪能でした。清代の小説『趙氏孤児』(孤児が科挙に合格して国政を動かす身分になる)などを翻訳し、科挙のような学問で登用する仕組みの性を感じて、プロイセン王国がベルリンを整備した時、ベルリン大学を創設する

のです。陰陽五行、十干十二支、易も研究しました。「モナド」の発想や2進法などは、中国研究からきたものとされています。



許慎



説文解字の見出し字



ライプニッツ



ライプニッツの“Monad”草稿

『説文解字』は、秦漢時代に使用された小篆の見出し字 9353 字、重文（古文・籀文および他の異体字）1163 字の 1 字 1 字を見出し字としています。類型的な意味を表す「偏旁」（意符：意味を表す符号）を 540 種とし、その偏旁で見出し字を分類し、偏旁を部首として索引できるようにしました。秦から漢に移った時代にも、今文派（漢時代に現れた口語）と古文派（戦国末期からの古文に基づく書言葉）のどちらを漢語とするかの争いが絶えませんでした。『説文解字』はこれに決着をつけたのです。ただ、近現代になり、甲骨文が発見され、金文の研究も進んだので、「字典」にせよ、「辞典」にせよ、大きな変化を迫られそこに近代イデオロギーやソシュールなどの西欧近代言語論も加わって、議論は複雑化しました。「輪読座」では、その言語問題も紐説いて、参考に供したいと思います。

#### (4) 白川静の「呪」と「呪術」

白川静は、どんなに非難されようとも、「呪術」という用語を使い続けました。

白川静の「呪」は、他者が対象を名づけることにはじまります。現代日本人はそれを忘れてしまっているのですが、近代まではその感覚が残されていたようで、「な(名)づける」という日本語を「なづける」（なつくようにする）とするとともに、同じ意味の漢字を宛てて「懐ける」としました。そこから「懐かしい」も派生したのです。万葉集にも「なつかし」という詠嘆が多数使われています。名前を付ける（なづける）ことは、名付けられた相手を「懐ける」（なつかせる）わけです。その「懐」の甲骨文字は白川静によれば、涙を垂れた目を拡大して死を哀惜する喪葬の儀礼を形象します。それは、一方の涙目を写したのではなく、その葬儀の「呪」を映したことになります。死者の意向に従うとか、場合によっては殉死するという「呪」でもあります。それが日本語の「なつかしい」にあてられたのです。

すなわち、名付けられた相手が親和し、服属し、思いどおりに働くようになる。それが「呪」です。その「呪」をあからさまにすれば、「手なづける」ことになる。この「呪」の作用を用いて、相手の考え方を誘導したり、問題を解決させたり、混乱せたり、残虐行為をさせたり。このように「呪」を「術」として用いれば、「呪術」になります。漢字は「名づけた対象」を見たまま写したのではなく、それが「呪」である相互関係を文字化したものです。だから、漢字は「呪」そのものであるというわけです。ですから、「遊：1003号」のインタビュー『漢字の記憶』にも、「漢字はソシュールの言語学に包括されない」という趣旨を白川さんはのべられています。ソシュール言語は「見るもの」と「見られるもの」に生じるとするが、漢字はその関係が生じる「呪」を形象しているからです。

この原稿を書いている、まさにそのとき、「なづける」と打ち込んだつもりで、「なづける」と打ち込んで、変換キーを無意識に押してしまったら、「懐ける」と表示されたので、ギクッとしました。それで、どうしてかと思って、「なづける」と打ち込んで、変換キーを押し

たら、「名づける」と表示されました。なるほど、あざといものだと思います。「懐く」を「なずく」と読んだら、「懐かしい」は「なずかしい」になってしまう。これは、「名付ける」ということと、「懐ける」、「懐かしい」ということを、西欧の「単語:Word」を基礎に切り離すべきだという考え方が優越した設計になっているのです。そんなことは大した問題ではないと思われるかもしれませんが、それこそが「呪」なのです。

例えば、私という存在に、両親は「秀元: ひではる」と名付けました。この名が規定する意味から逃れることはできません。これが「呪」です。それで、子供のころは「ヒデちゃん」と呼ばれ、小学校高学年になったら、下級生から「ヒデさん」と呼ばれ、18才を過ぎてからはヒデハルは読みにくいから、親しい仲では「シュウゲン」、後輩からは「シュウゲンさん」、尊敬を表する人は「シュウゲン先生」、編集学校では「バジラ」、「バジラさん」、「バジラ先生」などと呼ばれるようになった。私がそう名のつたわけではありませんが、そのすべてを容認しますし、そう呼んでくれる皆さんが大好きです。これらはみんな「呪」です。皆さんのすべての名前、呼び名、仇名、肩書、職名、称号はみんな「呪」ということとなります。あるいは「怠け者」、「人殺し」、「盗人」(ぬすつと)、「ヤクザ」、「前科者」・・・などのレッテルも「呪」です。

「呪」は、他者が対象を名付けることで、他者が名付けたイメージに沿うことになり、そう呼ばれたことにふさわしい対応を返す現象なのです。これを意図的にあやつるようになり、技術化すれば、「呪術」です。「オレオレ詐欺」は、そうした技術がなければ、成立しない犯罪です。それは「お母さん」とか「トモユキです」とかいう名が「呪」だからです。ネット差別が問題になっていますが、それも「呪」の効果を利用しています。その「呪」の効果の仕組みを利用して相手を動かせば、それは「呪術」です。このように、対象に名づけて、懐けるのが、人間の言語の特色であるという考えに基づけば、ソーシャルの言語論は人間の言語作用を無視した言語論ということになるのです。

### (5) 黄河流域の文化圏の記号・符号と洪水神

白川静はインタビュー『漢字の記憶』で、「それまでの(無文字時代の言葉の)観念を最も豊かに文字形象の中に取り入れるにはどうすればよいかというという観点で、文字はつくられたはずだ。無文字時代の観念は単に言葉として伝わるので、急速に変化し推移することはなかった」としています。ただ、漢字は意味を多様に変化させるとし、「文字同士の影響、接続、混合とか、いろいろな変化が可能になる」とも言っています。

黄河流域に、殷に先立つ新石器文明が現れ、銅・青銅器、文字らしき記号・符号、卜占が発生してきました。白川静は、それらの記号・符号は記憶を助けるが、それ自体が変化し、意味を多様化することはなかったとしています。この漢字以前の符号や記号しかなかった世界がどのような運命辿ったかを、6回の講義の内にお話することができるかどうかわかりませんから、ちょっと長くなりますが、どうぞお読みください。

黄河上流域から下流域まで、地域の産品に自給自足する環濠集落が現れ、文化を共有する環濠集落連合は、それぞれ独自の祭祀土器セットをつくり、戦闘用の弓・石器の鎌をつかって、他の環濠集落連合と激しく戦いました。考古学では、その環濠集落連合を「文化」(文化圏)とし、黄河流域に土器と農耕が出現してからを「黄河文明」と呼びました。その最古の文化が裴李崗文化(BC7000年頃～BC5000年頃)です。それは河南省に発生し、アワの耕作、ブタの畜産をして、紅陶を制作しました。そこにトルコ石が現れ、最古の東西交流が始まったとされています。これが黄河流域に波及し、黄河上流域から中流域に、仰韶文化(BC5000年頃～BC3000年頃)、下流域に北辛文化(BC5300年頃～BC4400年頃)がおこったというわけです。

仰韶文化は、白、赤、黒の幾何学文様の彩陶を制作し、その初期の半坡遺跡(西安)に人面魚の文様が現れ、半坡文字(記号)が土器に記されました。これが西方に拡張したのが馬家窯文化(BC3100年頃～BC2700年頃)で、馬家窯文字を土器に印し、そこに青銅器が出現したのです。

これを引き継いで、渭水上流から蘭州にかけて、齐家文化(BC2400年頃からBC1900年頃)が栄え、雑穀、粟を栽培、牧畜を行い、馬を飼育します。銅の鏡・装飾・器物・道具を制作し、獣骨の卜占を開始しました。この黄河上中流域は洪水が多く、BC2000年頃、上流域の喇家遺跡は洪水で一挙に潰滅し、土砂に埋もれたまま発掘されました。「東方のポンペイ」と呼ばれています。

白川静はインタビュー『漢字の記憶』で、「祖神の発生は洪水神に由来する」としています。仰韶文化の半坡遺跡とその文化を共有する環濠集落に多数出土する「人面網紋彩陶盆」などの人面魚を、大洪水から文明を回復した「禹」の父(祖先神)の「鯀」(こん)としています。「禹」は殷王朝に先立つ夏王朝を創始した「帝」とされています。そうだとすれば、夏王朝は仰韶文化に生じたこととなります。



半坡文字



「人面網紋彩陶盆」



馬家窯文化の記号文字



馬家窯文化の「青銅刀」

黄河下流の北辛文化には分厚い黄褐陶と薄目の紅陶の祭祀土器セットがあって、動物を敲き、その肉を削ぐ打製石器と雑穀栽培、木の実を採集して粉食するための磨製石器類を用いました。その紅陶に「泥質灰陶器底泥質紅陶腹片」に見られるような刻画符号が発見されます。これを受け継ぐ大汶口文化(BC4100年頃～BC2600年頃)では紅陶が優越し、真鍮(銅と鉛の合金)やトルコ石・ヒスイ・象牙の装飾品などが現れ、日本海海路、南方海路を通じて招来されました。「大汶口文化刻符陶尊」などに、山上に日月を描く符号を中心に独特な符号が配列されていますが、ずっと後世まで残った黒龍江方面のシャーマンが語った山上に留まる日月の神話のモチーフのようです。その後期に黒陶が多くなり、龍山文化(BC3000年頃～BC2000年頃)にとってかわられました。



刻画符号のある泥質紅陶腹片



「大汶口文化刻符陶尊」とそこに描かれた符号



龍山文化の「丁公村遺址出土刻字陶片」



龍山文化:黒陶瓶



龍山文化:黒陶盃

龍山文化が大汶口文化にとってかわった頃、黄河文明の文化圏は戦いと災害で疲弊していました。その本拠地の山東龍山文化はロクロを使った精巧な黒陶の祭祀セットを備え、「丁公村遺址出土刻字陶片」に見られるような絵文字を用い、北方の遼河文化と交流して、龍の文様を導入しています。他の文化に見られない巨大な石鏃が大量に出土することが確認され、りゅう弩弓を改良し、大きな石鏃の矢を遠方まで飛ばす技術が開発されたことを示しています。

### (6) 龍山文化、華北を席捲

山東龍山文化は、西方に拡大します。黄河中流域の仰韶文化は彩陶の土器セットを棄て、山東龍山文化の土器セットの形態を導入し、その地の土を用いた灰陶を用い、河南龍山文化を形成しました。土器セットは祖神や自然神を反映していますから、それを棄てて、龍山文化の祭祀に変更したということになります。でも、このような場合、完全に切り替えたというのではなく、おそらくは両者を編集した祭祀となったことでしょう。さらに龍山文化は黄河上流域に拡張し、陝西龍山文化を形成しました。

河南龍山文化の領域にある王城崗遺址(河南省登封県王城崗)は、1959年に中国社会科学院考古研究所の徐旭生が調査を開始しました。1983年、考古学者・夏鎬が発掘を指導して、その文化の最下層までを明らかにしたのです。その最下層に裴李崗文化があり、龍山文化・二里頭文化・二里岡文化・殷晩期・西周の遺物の層があり、表層は春秋時代の各時代の遺物の層から成っていました。この地は黄河文明最古の裴李崗文化の環濠集落が造営されて長く栄えましたが、天災で壊滅したものか、氾濫原になっていたかしたのでしょうか。黒陶文化が周囲の彩陶文化の環濠集落を管理する大きな環濠集落を造営します。黒陶文化の衰退後、殷帝国を発生させた二里頭文化・二里岡文化になり、さらに殷が地域を管理する都城を築き、それを周が受け継ぎ、春秋時代に持続されたということになります。この地は夏王朝の創始者・禹が一時逃れ、後に都とした「陽城」ではないかと20世紀末の世上を騒がせました。

その仮説によれば、裴李崗文化の統治者を五帝の最初の「顓頊せんぎょく」とし、その子孫の「鯀」は仰韶文化の「帝堯」に仕えたとします。「帝堯」によって、洪水からの復興を命じられた「鯀」は失敗して殺されます。「帝堯」は「舜」に復興事業をまかせますが、「舜」が「鯀」を暗殺したと疑われるのを嫌い、それを「禹」に譲ったといえます。苦難の中で災害復興に勤しんで災害復興を成し遂げた「禹」に「帝堯」は好意を寄せます。帝位を「舜」に譲ることになっていたのに、「禹」に譲る可能性が出てきたのです。司馬遷『史記』の「夏本記」に「禹は舜之子商均を避けて陽城にいく」とあって、「禹」は「舜」の嫡子、商均に付け狙われ、祖先の故地、陽城に引きこもったというわけです。「舜」が帝となり、「舜」は死に臨んで商均に位を譲らず、「禹」を帝としたといわれています。そして「禹」は陽城を都として夏王朝を開きました。そうだとすれば、陽城の遺跡は裴李崗文化の遺跡で、仰韶文化の影響がなく途絶えた遺跡であるから、王城崗遺址は、その条件を満たしているというわけです。もっとも、この説は成り立ちえないので否定され、新たな仮説が立てられています。その仮説については、6回の講義の中でお話しします。

一方、BC5400年頃から揚子江下流域の稲作文化を受け入れ、北方の北辛文化・大汶口文化の影響を受けた淮河下流域に青蓮江文化が栄えました。大汶口文化が龍山文化の攻撃によって滅亡していくとき、黒陶を嫌って仇花のように現れた花卉文の彩陶を継承していました。あるいは「龍虬庄遺址出土刻字陶片」に残されたような絵文字も用いています。その文字は今も四川・雲南北西部・ベトナムに住む彝(イ)族の文字の祖型と仮説されています。青蓮江文化は南方からの移住者を受け入れ、龍虬庄文化(BC5000年頃～BC2000年頃)に移り替わっていきます。1997年、日中合同で龍虬庄遺跡の発掘調査が行われ、人工栽培の粳稻(japonica)の栽培が判明しました。この文化は龍虬庄文化と名づけられ、ここで改良されたジャポニカが日本列島に伝わったとされるようになっていきます。



「龍虬庄遺址出土刻字陶片」



「青蓮崗文化彩陶鉢」

(9)

それでは、のちの周の文公(殷を倒すすべての準備を整えた)はどうしたのか。白川静はインタヴュー『漢字の記憶』で、「人間が漢字に生命を吹き込むようになった」といっています。どうして「文房四宝」なのか。それを使って、漢字に意味を吹き込むようになったからです。甲骨文字は特殊な巫祝が甲骨を焼いた針で彫り込み、漆を施しました。周には硯の祖先・調色器が出現して、顔料をつぶして溶いて、筆様の筆記で布などに書きました。それが金文で、柔らかい筆致が現れるのです。そこに、人間が神々、鬼神を媒介に行うあらゆる儀礼に歌う詩を、その観念ごとに記すことになり、恋愛から戦闘までの関係の編集の可能性を拓くことになりました。その詩は『詩経』に編纂されます。

殷から周への漢字の変容によって、「名を呼びだす」ことは、「神を呼びだす」ことになりました。それを「興」といいます。神々との共鳴を味わうことを求めるのが「興味」です。

「興」について、白川静は『興の研究』という研究論文にまとめましたが、今回は『白川静著作集 第10巻 詩経II』の「興」に関する節の簡潔な小論文を輪読しながらめぐって、「興

味をもつこと」の本来を皆さまとともに取り戻したいと思います。これによって、『中国古代の文化』、『中国古代の民俗』の肝をつかむことができるようになります。

さらに、それが各種の民族の祖先神話を統合して、国家神話をつくり出し、天の概念、地の概念、人の概念を枠組みにした宇宙神話の編集が可能になりました。それらの小論文を輪読することで、白川静の『中国の神話』も自由自在に読めることになるでしょう。

最後には、辛亥革命がおこって、漢字を“Word”とする運動の中で甲骨文字が発見され、今は漢字は忘れ去られ、重要問題となっています。それとともに、日本人が漢字を採り入れたことで、何がおこったのかを総括して、輪読座を締めくくりたいと考えています。

以上が、輪読座「白川静を読む」の趣旨を述べさせていただきました。

きっと、笑いあり、思索ありの全脳全開を味わえる輪読となるでしょう。プログラムは下記の通りですが、若干の変更がある可能性はあります。

前提の学習はなにも必要なく、知識は必要としません。むしろ、そんなものはない方がよく、あれば捨てた方がよいです。ただ読むことで分かって、新たな知が拓けてきます。どうぞ、白川静と大いに遊ぶ気分でご参加ください。

## 第一回 漢字へのアプローチ

講義：「字典」と「漢字辞典」の編集史

『漢字の記憶』（インタビュー：「遊 1003 号」；1978.10）

「白川静著作集 第3巻 漢字Ⅲ」

『文字逍遥』より 「遊字論」「道字論」より抜粋読み

「白川静著作集 第2巻 漢字Ⅱ」

『漢字の思考』

「白川静著作集 第12巻 雑纂」

『三部の字書について』（字統の編集について・

字訓の編集について・字通の編集について）

## 第二回 漢字が生まれた時代

講義：甲骨四堂（羅振玉・王国維・董作賓・郭沫若）と日本東洋学の形成

「白川静著作集 第4巻 甲骨文と殷史 II 殷史叢考」

『卜辞の本質』『殷の社会』『古代中国の共同体』

「白川静著作集 第10巻 詩経Ⅱ」

「第四章 三頌研究 一、周頌」

『王国維説批判』『金文と辟雍の儀礼』『周頌の時代』

「第四章 三頌研究 三、商頌」

『魯頌と商頌』『[左伝]と孔子説話』『商頌と殷神話』

「白川静全集 別巻3下2 甲骨金文文学論叢下2」

『羌族考』より抜粋読み

## 第三回 「興」の世界像

講義：白川静『興の研究』の構造

「白川静著作集 第10巻 詩経Ⅱ」

「第七章 詩の発想と表現 一、興的発想の本質」より

『賦比興三体』『気分象徴説』『発想法の民俗学的検討』

『詩の発想基盤』『祭事詩の発想』『祝頌詩の発想』

『草木中魚の興』『樹木による祝頌』『草摘みの興』『時節と修祓』

『草摘みと予祝』『采薪の俗』『伐薪と祭祀』『興的発想の本質』

#### 第四回 国家神話と宇宙神話

講義：周建国神話と楚辞天文篇(宇宙生成神話)の構成

- 「白川静著作集 第10巻 詩経Ⅱ」
- 「第八章 雅頌詩篇の研究 二、大雅詩篇の展開」より
- 『文王寿命の説話詩とその背景』『国家神話への要求』『大雅と頌』
- 『祖祭と饗宴』『政治詩と社会詩』
- 「白川静著作集 第6巻 神話と思想」より
- 『神話と経典』『楚辞天問小箋』
- 「白川静著作集 第8巻 中国古代の文学」
- 『楚辞叢説』より抜粋読み

#### 第五回 神話の説話化と習俗

講義：文明発生神話(三皇五帝)と社稷共同体、盗・客・士の出現

- 「白川静著作集 第10巻 詩経Ⅱ」
- 「第二章 説話詩の研究 一、周頌中の農事詩」
- 『来牟と嘉禾』『衆人と農夫』『籍田の礼』『籍田の礼の参加者』
- 『婦と士』『氏族共同体的儀礼』
- 「第七章 詩の発想と表現 二、生活習俗と詩の表現」より
- 『集団表象と習俗』『投果の俗』『恋愛詩の表現』
- 『好歌呪詛』『即融的自然観とその展開』
- 「白川静著作集 別巻3下2 甲骨金文文学論叢下2」
- 『媚蟲関係字説—古代社会における呪術儀礼の一面』より抜粋読み

#### 第六回 日本語としての漢字

講義：近代漢字の形成問題 近代白話運動から簡体字へ

- 「白川静著作集 第11巻 万葉集」
- 『古代歌謡の世界—(詩経)と(万葉集)』
- 『万葉集と中国思想—その受容のしかたについて』
- 「白川静著作集 第12巻 雑纂」
- 『古代文字学之方法』
- 『電腦時代の漢字のゆくえ』『猶浅さを嫌う』